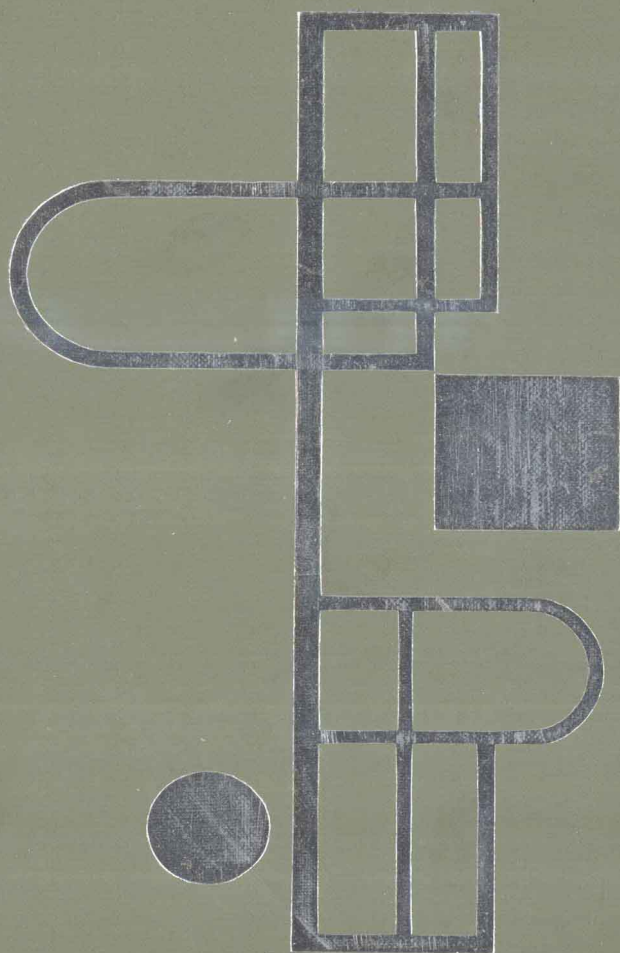
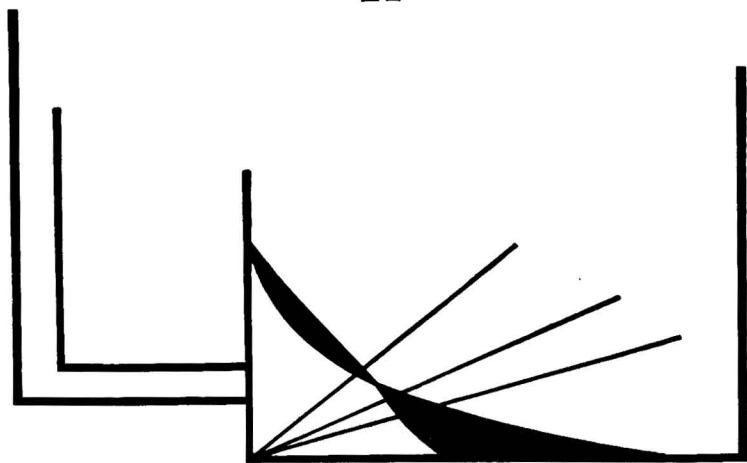




田宮虎彦 集

新選 現代日本文學全集

24



筑摩書房版



田宮虎彦集

昭和三十五年三月十五日 発行

著者 田宮虎彦

発行者 古田 晁

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五
山田 一雄

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

〔電話〕東京 三局 四七六五一（代表）
振替 東京 一六五七六八

監製 印刷 株式会社 精興社
製本 株式会社 精興社

田宮虎彦集 目次

物語の中	五	土佐日記	二五
末期の水	一五	江上の一族	一六
菊の寿命	三	三界	一六
非運の城	三	異母兄弟	一七
大盗余聞	四	S町の歴史とその住民たち	二〇
忠義物語	六	琵琶湖疏水	二三
ある女の生涯	七	比叡おろし	二三
異端の子	八	富士	三六
朝鮮ダリヤ	四	菊坂	四四
幼女の声	二〇	かるたの記憶	五八
梅花抄	一九	父という観念	六八

暗い坂	三七五
現身後生	二六四
童話	二九二
母の死	二九七
銀心中	三〇七
ぎんの一生	三一九

黄山瀨	三三一
愛情について	二四四
田宮虎彦論	四六
解説	四三

装幀 恩地孝四郎
 恩地邦郎

田宮虎彦集

慶応四年七月二十七日、越後長岡が落ちた。

その報せを待つてでもいたかのように、白河口、平潟口で奥羽同盟の諸藩兵と小競合ひに日をすごしていた西国勢が、雪崩をうつて奥路に攻めいつて来た。棚倉、三春、二本松、泉、中村の諸城が落ちたのはまたたく間もないことであつた。旬日後の八月十日、阿武隈山塊を蔽つて西国勢はひたひたと仙台藩の南境に迫つていた。洋袴に洋銃を杖についた異様な西国兵たちは、駒ヶ峯南麓からさかんに斥候を仙台領にはなつていたが、十三日未明、ふいに銃先を転じると母成峠、中山、盛至堂、三斗小舎の間道を会津に向つて動きはじめた。会津は藩をあげて天嶮によつたが、二十一日、母成峠石筵口が落ちた。翌二十二日、会津城はすでに西国兵の重囲の中に孤立していた。

黒管の城にも、そうした列藩同盟の諸城が秋の枯葉のように落ちてゆく報せが踵をついてつたえられていた。きづかわれた黒管藩御長柄奉行山中重次郎以下四十三名が、内応した三春兵と西国勢に腹背をつかれて、ことごとく斬死し

たしらせがとどいたのもその間のことであつた。長岡の落ちたのも新発田藩の寝返りのためであり、奥羽勢のくずれたつたのも三春藩の寝返りのためである。黒管の城内には銃や槍をとぐ砥の首とともに、三春藩の怯懦をあざわらう声が満ち満ちた。

九月九日、二本松藩主丹羽長国がまず降伏した。翌十日、米沢藩主上杉齊憲が降伏した。十五日には事実上奥羽同盟の盟主であつた仙台藩主六十二万石伊達慶邦が降伏した。同日福島藩主板倉勝尚が、十七日には上ノ山藩主松平信庸が、十八日には村松藩主堀直賀が降伏した。ついで二十二日、三旬の籠城を解いて会津藩主松平容保が西軍の軍門に降つた。二十四日、泉藩主本多忠紀、湯長谷藩主内藤政義、磐城藩主安藤信正、二十五日、長岡藩主牧野忠訓、二十七日、庄内藩主酒井忠篤、出羽松山藩主酒井忠良、亀田藩主岩城隆邦、そしてさらに一句の後の十月九日には盛岡藩主南部利剛が降伏した。盛岡藩では藩老南部光尚、遠野伊賀の二人が、すでに仙台にあつた奥羽追討総督九条道孝に藩主南部利剛の謝罪文を奉り、おのれらは鐵腹を切つて果てた。

慶応四年十月十日（新暦十一月二十三日）、江戸はすでに東京となり、慶応という年号は明治とかわつていたが、黒管城内ではまだ旧のまま慶応の年号を用いていた。仔細はない。黒管一城をのぞく奥羽越列藩同盟のことごとくが薩長官職の前に旗を卷いた今にいたつても、なお

黒管のみは徳川政府を己れの支えと信じようとしていたのである。

仙人沼峠から霜の濃い往還を蹴つてかけ降りて来る騎馬がいた。朝日は鷲台山と赤石峠の間からにぶひかりをななめになげて、葉の落ちた木々のかげが往還に長くのびている。やがて騎馬は黒管の町並にかかると、雪笹山の山腹を武家屋敷の石畳に高い蹄の音をひびかせた。

常ならば早駈けは大手門で一度騎馬を下り、威儀を正して城内に駈けるのが例になつていが、今日は馬をとどめる気配もなく大手橋をかけぬけた。警固の徒士が

「下りよ、下りよ」

と連呼したが、騎馬武者はただひとこと

「火急」

と叫んでそのまま本丸の藩老詰所まで駈けぬけていつた。騎馬は御書院番組頭八十石をたまわつてゐる桜沢隆利であつた。番所にのりつけると、馬はそのまま横倒れになり、鞍からずり落ちるように桜沢は下りて、蛙股のまま大地の歪みをたしかめるように番所にはいつていつた。そのげしい吐息が冷たい初冬の気配に白く凍つてみえた。

騎馬は南部利剛の恭順をしらせたのである。仙台の野には錦旗がはためいて、青葉城下は鼎がわいたようであるという。それだけいうと桜沢は意識が絶えた。狐禅寺の飛地から三十八里の山坂を駈けとおして来たためである。

藩老山中陸奥は桜沢を家族のものに下げるよ

う命じると、番所に藩の重職を呼びあつめた。

「このような報せをもつて来た、詳しいことは今夕にも二番使者が帰つてくるだろう、しかし、事態はここに迫つてゐる」

陸奥は八十三歳の老齢であつた。十六年前から熊坂村の別荘に隠退してゐたのを、このたび再度のお召しで藩老首席に坐つてゐた。禄高二千五百石、黒管藩主山中和泉守重治の大叔父にあたる。長寿眉にかくれた静かな眼差しが八十三年の生涯を思ひかえすように、しばたたく癖があつた。

列座したのは、落老山中左膳、六十五歳、禄高千三百石、同山中重徳、四十歳、禄高千二百石、御旗奉行堀江真琴、五十九歳、禄高七百石、御勘定奉行勝田三右衛門、七十二歳、禄高四百石、御目付横沢祐之進、四十三歳、禄高三百五十石、御用人壺井勝作、四十八歳、禄高同断、御近習頭鈴木主税、三十八歳、禄高三百石の七名である。右のうち山中左膳は陸奥が再び召し出されるについて、同じく隠居をとかれたものである。

寒気がはげしかつた。七人のうち誰一人言葉をはさむものもない。やがて陸奥について老齢である勝田三右衛門が、しわがれた声で「二番手の早駆けもおつつけ帰城であろう、戦いはそれからよ」といつた。一座はうなずきあうと評定の席を立つた。

陸奥は追いつめられてゐる自分を感じてゐた。

それは列藩同盟の軍に加わつた御長柄奉行山中重次郎以下が、三春藩と岩国藩の兵卒に包圍されてことごとく斬死したと報らされた時からであつた。いや、その時陸奥はまだそれほどに追いつめられるとは思ひもよらなかつたのが本心だつた。血路はなおひらけると思ひもし、立ち直つた奥羽列藩の兵が、再び関東八州に馬をすすめることすらも信じてゐたのである。嘉永安政の交からのことだが陸奥は激しい憎しみを薩長にいだいてゐた。その力にみずから屈せねばならぬなど考えてもみなかつたことだつた。しかし、今、その力に大樹とたのんだ徳川政府がたおされ、自分すらが追いつめられてゐるのだ。三春、岩国の兵の包圍の中で手負ひのものをおのれらの手で殺し、敵陣に殺到してことごとく斬死したという重次郎たちと同じ運命が、今あきらかに陸奥の目の前にあつた。陸奥は長身瘦軀の重次郎の面差しをふと心にかへた。怒気が老いた心ににえだぎつて来る。負けたくはないのだ。だが所詮は負けねばならぬところまで来てゐた。陸奥は一人のこつた溜りの間で、或は十日後に迫つたその日のことを思ひつづけた。午の刻はすでにずつと過ぎてゐた。陸奥は茶坊主のもつて来た食膳をまずそうに食べ終つてから、小姓一人をつれて天守にのぼつていつた。三層の天守は黒管二万三千石の領地を一望のもとにみはるかしてゐる。三月前、陸奥が召し出された頃にはまだ青々としげつてゐた四圍の山々は、いつか黄葉し、それもすでに散つて

いた。落葉松の葉末が色ばみ、紅葉がもえるようににみえたのは、つい昨日のことのようであつたが、すでに迫りはじめた長い冬が冷たい暗いよどみを山肌にただよわしてゐた。物見の櫓が淋しそうにひとつ立つてゐる外は、盆地いちめん黒い土肌をみせた刈田のあとであつた。天守にたつて陸奥は薄水の張つた野の涯をながめやつてゐた。八十三の老いた眼には、もはや遠い山際はかすんでみえなかつたが、それでも八十三年みつづけて来た黒管盆地の地の理は、陸奥の心の奥に手にとるようになつてゐるのだつた。

「長十郎」

やがて陸奥はしづかに小姓の名をよぶと、わけもない笑いそうにかへながら

「お前もおぼえていようが、熊坂の別荘では僕はよく尿をもらしたもののよ、僕はもう老い朽ちてしまつてゐたと思つてゐたが、このようにまた藩老の職につくと、不思議なものじや、尿をたれるどころか、妙に女の肌がこいしゆうなるぞ」

といつた。長十郎は何と答えてよいかわからず、ただ「御意」と答えた。それから二人はまた盆地の涯をながめやつた。黒管の町並や武家屋敷からは静かな炊煙のぼりはじめ、それは山肌の狭霧ともつれあつて、冬の空をたゆたつて流れてゐた。

夕暮がうすいときを垂れこめる頃になつて、二騎の騎馬が仙人沼峠から往還へかけおきて来

た。御納戸組頭瀬沼征助と御徒目付酒卷督兵衛の二人であつた。二人の復命は横沢の復命に加えて、仙亡に屯ろした西軍の軍勢三万五千という数をしらせた。

その夜また陸奥は重職のものをよびあつめた。朝あつまつた七名の外、番頭遠藤崎三が加わつてゐた。遠藤は四十歳、四百七十石取である。

「如何したのか」

蠟燭の灯がまたたいてゐた。四辺を人ばらゐしてゐるので、時々八人の吐く吐息の外は、雪笹山になる松風がきこえるばかりであつた。誰の答えもないとわかると陸奥は横沢祐之進をみて

「御目見得以上は幾名か」といかけた。横沢が

「百二十一名」

と答えると、陸奥は重ねてといつづけた。

「では、御目見得以下卒にいたる総数は」

横沢は和紙綴の藩士席順控をまさぐつて、それを赤い油のたれた蠟燭に近づけると、やがて「総数五百十九名、うち病いにて奉公かなわぬもの十三名ございますが」

と答えた。陸奥はしばらく眼をじてゐたが、重ねて

「女子どもの数」

とみじかく言つた。

「御目見得以上の家族四百五十二名、御目見得以下二千六十三名」

そこでまた沈黙が暗くおちた。今夜も奥御殿

からは琴の音がきこえる。奥には奥羽に名を知られてゐる浅川という琴の名手がいた。やがて女たちのくつたくもない笑い声が風にのつて八人の耳をなでた。蠟燭が次第に燃えつきてゐた。西の下刻からはじめた評定も、一番鶏がないた時、何の結論も結ばぬまま、勝田三右衛門が「江戸詰の鈴木殿が今明日中に赤石につく筈、その帰参をまつて藩是をとりまとめられては何なものか」と呟くように言つた。

江戸詰藩老の鈴木鼎が黒菅藩恭順のことをはこんでいたという噂は、誰もひそかに知つていたことであつた。鈴木鼎が江戸藩邸を脱出したという報せをうけたのは、会津が落城した次の日のことである。品川から漁船にのつて千葉の船橋にのがれ出たというのだが、その時、御近習頭の鈴木主税がつと居すまいを正して

「勝田殿は恭順のおつもりとみえる」と刺すようにいつた。勝田の顔がみるみる青ざめていつた。それは蠟燭の灯りが三右衛門の頬に奇妙な土色をかげらしたから判つたことだが、

やがて、三右衛門は左においた脇差をふるえる手でつかむと、それでようやく心のたかまりを制すようにしばらくじつと眼をつむつた。それから

「何でこの皺腹が」

と老いた声でいつた。

しかし、この時、陸奥が

「勝田殿の言われるとおり鈴木殿の帰りを待と

う、薩長もこの黒菅の小藩をそう急に討ちはしまい、もうほとんど雪にうずもれてしまふのだ、あるいは春までこのままにすぎるかも知れぬ、横沢、朝明けに赤石に誰か様子を見に走らせてくれぬか」

そう言葉をきると、のどにたまつた痰を切つて座を立つた。蠟燭がその時燃えつきた。

陸奥の寝所は本丸西溜りにとくにしつらえてあつた。小姓のもつて来た手燭をたよりに、陸奥がその寝所の衾に横になつた時、黒菅盆地の村々で暁をつげる鶏がしきりにないた。寒気のひしめくのがきこえるようであつた。凍てついたそんな晩には遠い村々の鶏の声まで冴えてきこえるのである。陸奥は眼をこじらした。西国兵に恭順をちかうか、それともすでに亡びた徳川家に殉じてあくまで抗うか、心は二つにまよいはじめてゐた。否、陸奥自身は恭順とすでに心をきめていたといつてよいかもしれぬ。それは新政府をみとめるというのではさらさらない。だが、会津庄内をさへ席捲した薩摩勢に、どうして黒菅二万三千石の小勢がさからいきれよう。抗えば死がそこにあるだけだ。もとよりおれのごとき老骨には惜しくない生命である。だが、そうとばかりは言いきれない。三月前、熊坂村の別荘を出る時、陸奥は老妻のいく子に水盃をして別れて来た。その頃はまだ西国兵は白河に釘づけであつたし、列藩同盟の兵は輪王寺の宮の綸旨を奉じていたのだ。その日は黒菅の呵から三里山里にはいつた熊坂村でさえ日盛り

はまだ暑かつたから、陸奥はいく子にむかつて「暑氣ばらいの岩清水よ」

といつて笑いかけたが、いく子は笑いもせず、皺のよつたまがしちに真珠のような涙をうかべていた。桜沢の復命をきいてから小姓の長十郎をつれて天守に登つた時、ふと思いをよせたのはいく子の皺よつたそのまがしらであつた。思ひをひそめると、そのいく子の年老いた顔に、十六の歳自分に嫁いつて来たあの晩春の日からの思い出が、走馬燈のようにうかぶのだつた。今は浅黒く日差しに灼け、骨太の身体は一層前にここんでしまつたいく子の姿だが、その姿には匂つた桃の花のような思ひ出が重なつてゐる。女の肌が恋しいと長十郎に言つたのは、何もみだらな思ひが陸奥の心をよぎつたからではない。ただいく子の涙ぐんだ老いのまがしらに心ひかれたからであつた。自分にしてそうなのだ。まして、四十、五十の壮者や、二十、三十の若者の胸のうちはどうであらう。評定の席で、年をとると気がおくれるものか、と憎々しげに主税のつぶやいたのと思ひ出された。あるいはそうかもしれない。しかし、戦うとすれば藩主重治の生命はない。南部光尚が皺腹切つたことは藩主の生命をたすけるためだ。自分も、またこの皺腹はきらねばならぬ。自分の生命が惜しいわけではない。陸奥はそんな思ひをつぎつぎにくりひろげていた。

ふと気づくと、かすかに暁の色が忍びよつてゐるようである。陸奥は起き上ると煙管をさが

した。

「誰か」

長十郎が次の間から進み出た。火打ちをうつのをまつて、それに煙管の火をつけながら、陸奥は長十郎をみた。まだ女の子のような柔かい肌である。

「長十郎、お前はいくつになつた」

陸奥はふとといかけていた。

「十七でございます」

「死んでもよいか」

「御意でございます」

陸奥は長十郎のそのひきしまつた口もとをしばらくみつめていたが、やがて

「もうよい、さがれ」

といった。それからまた衾に横になつたが、老いた臉はなかなかあわさうとしなかつた。だがいしばらくまどろんだようである。馬の嘶きが枕の下できこえるような気がして眼ざめたが、あたりは昨日のように冴えきつた初冬の気配であつた。

赤石に出した横沢の配下から、鈴木鼎たちの乗つた船が二日前平潟の沖合を通つたという報告をうけた。もう赤石にはいつてよい頃であつた。だが、塩竈、石巻には西国藩の兵が屯ろしているのである。そして、鈴木鼎の乗つた便船が西国藩兵にとらえられていたなら、鈴木鼎の帰藩を待つことは空しいことも知れぬ。陸奥は袴をつけると奥へ機嫌の奉伺にいつた。城の中は静謐ながら、はげしい殺氣がみなぎつてゐるのに、ここはまた何というのどけきであらう。うすれた洩れ日の日差しが白い書院の障子に低くかげつて、たきこめた伽羅のふくいくとした匂いが薄暗い静かなよどみをほんのりとたたきわしてゐる。藩主和泉守山中重治は、やや下ぶくれた卵なりの柔和な面差しで陸奥を迎えたと「どうじや、仙台や会津はもう江戸へ攻めいつたか」といつた。陸奥は、下げていた首が上げられぬ思ひがして、ふと涙が前についた手の甲におちた。やつとその涙をかくすと

「いや、薩摩勢もなかなか手剛うて、思うにまかせぬようにございます」と声をのんだ。重治の面差しがふとくもると、はきすてるように

「左様か」

といつたきり再び陸奥をみようとしなかつた。やがて、不興氣に座をたつた重治の姿が奥の薄闇に消えてゆく時、その豊かな白い頬がちらりと陸奥をみたようであつた。殿には何も聞かせまいと思う――黒管藩三百年の間のしきたりがそうであつたのだ。嘉永六年、重治が老中に召された時も扈從したのは陸奥であつた。もう幾年の昔にならうか。重治は賢明な君主であつた。重治一人の考えで決して事を運ばぬ要領の深さは、閑老の集りのあつた時など必ず陸奥の献策をいれたものである。陸奥はいく子の織つた手織の袖で静かに涙をぬぐうと、だまつて座を下つた。うちくずおれたまま渡殿まで来て陸

奥ははじめて歔歔した。渡殿の廊下のきざはしのかげに、ひと月余り前家臣たちの献上した鉢咲きの菊の花が、今は霜にあい黄いろなりにすがれたままうちすてられてあつた。陸奥のうるんだ老いの眼に、そのすがれた哀れな花の果てがうつつた。陸奥はようやくすりなきをやめると、その鉢咲きが姸をきそつていたしばらく前の姿を思うともなしに心にうかべた。その中には陸奥の老妻いく子が熊坂村の閑居で丹精した管咲きもあつた筈だ。あの観月と名づけられた管咲きのように、黒宮の城の運命もきわまつているのだ。陸奥は渡殿まで送つて来た近習の斎藤大助に

「年齢を重ねるとつい涙もうなりましてな」と声をかけて、おのれの涙面を羞らうように笑つた。そしてそのまま本丸の溜りに足をはこんだ。そこに御目見得以上の非番のものが、急に深まつた寒さを唐津焼の大火鉢をかこんで高声に話しあつていた。福島会津の敗報を論じあつてゐるのであつた。陸奥の姿をみて、あわてて報せの太鼓をならそうとする茶坊主の良海を、陸奥は眼でとどめてひそかに三番火鉢の傍に坐つた。そこには御書院番の矢沢帯刀、同じく重蔵、御弓方由沢芳之進、小十人頭磯江幸助の四人が坐つていた。四人が座をしごつて平伏しようとするのを、これもまた陸奥は眼でおさえた。そして右手を火鉢のつややかなふちにあて、左手をふところにして丹田をおさえた。皺腹は力がなくなつてゐる。その皺腹も七十の声をきく

までは鉄のようにいつもかたくしこつていたものだが、この下腹の弱りは果して年齢だけのせいであるうか。今日で三晩、陸奥は自分が殆んど仮睡もしなかつたのをしつてゐる。陸奥は眼をとじた。かすかに座のゆらぐのを感じたが、その時、近くで

「今になつて薩摩に恭順を示そうというのか、徳川家譜代の恩顧を知らぬ犬侍め」と

と怒氣をかくさぬ声がきこえた。鈴木鼎のことを言つてゐるのであるうか。陸奥の長寿眉がかすかにうごいた。陸奥はこの声の主を知つてゐる。剣術指南役山崎剛太郎の声であつた。剛太郎は三十九歳、六十石をたまわつてゐる。小野派一刀流浅利義明門下の逸材と称せられ、安政三年十月、重治江戸勤番の頃召抱えられたものであつた。山崎はそこで大笑した。これにこたへてゐるのは書替改役内沢利行であつた。「そうよ、京都政府など今でこそ薩摩や長州にかつぎあげられてゐるが、つい先頃までは三条河畔からさえ洩れ灯のみえる茅屋で、短冊や色紙を商つてゐたものたちのことよ」

陸奥はまた遠くでこんな言葉聞いた。それは勘定方野沢隆作の声で

「西国勢といえどもこの黒宮の嶮がおとせるものか、天嶮の要害は会津の比ではない、加うるに黒菅武士の勇胆がある」

良海が茶をもつて来た。陸奥はそのかすかなあたたかさを両の手でいだきながら、静かに茶を啜つた。甘い渋味が口うらに残つた。陸奥と

ても戦いたい。大義名分を正したいのだ。薩長はもとより、おちぶれた西国大名の一人にすぎぬ京都朝廷に、何の恩顧があろう。恭順とはただ黒菅藩山中家を救う窮余の策にすぎないのだ。いつか陸奥のいることが一座に知れわたつたのであろう。ざわめきはやんで、涙をすすする声があちちこちらにした。陸奥は良海をよんで

「酒肴をふるまえ」

という座を立つたが、かすかに背後で

「君側の奸」

という声をきいたように思つた。陸奥はふりかえろうと思つたが、その心を制して、静かに西溜りの控所にひきあげて来た。しかし、耳もとに残つてゐる「君側の奸」という声は、脇息にもたれでもなお背にきこえてゐるようであつた。老人の空耳ということがある。あるいはそうかもしれない。だが……。重い淋しさが諦めのよう

に陸奥の心にしづんで来た。

陸奥はかつて伊藤平五郎という御鷹方同心に江戸屋敷で斬りかけられたことがある。世説には重治が旨をふくめたということだが、陸奥はそれを信じない。その時も平五郎は「君側の奸」とよばわつて陸奥に斬りかけて来た。幸い傷は浅く、かえつて陸奥の家来杉村久兵衛のために平五郎が斬られたが、程なく陸奥は隠居を願ひ出て、熊坂村に隠居したのであつた。陸奥は己れにも酒を運ばせて一人で酒をくんだ。やがてかすかな平安が陸奥の心に落ちて来た。その夜陰、赤石の港から早駆けがついた。番

所で堀江真琴が会うと、江戸詰の鈴木鼎が赤石に上り、遍立寺に憩うているという報せであつた。陸奥はその報せをきくとほつとした、何故ほつとしたか。それはわからぬ。わからぬながら鈴木鼎をたよつていることはわかつた。未明の刻には帰城するであろう。陸奥は迎へるものを二十騎出せと堀江に言つた。「御意」といつて堀江が座をたつのを見送りながら、陸奥は「堀江」

と声をかけた。呼びとめられて堀江が不審氣にふりかへつたのを呼びかえしてから、陸奥はその耳に

「御足労でも貴殿御自身で指揮をとられたい、召しつれるものは貴殿腹心のものを選ばれるように」

といつた。陸奥には思ふ仔細があつた。果してそれは杞憂ではなく、鈴木鼎を迎える二十騎に先だつて、山崎剛太郎が屈強の若侍十数名をつれて赤石峠にむかつていた。二十騎の騎馬はその山崎らに赤石峠の鷹の窪で追いついた。

赤石街道に砂煙があがつて、やがて二十騎が黒菅への下り坂を駈け下りて来たのは、未の下刻を少しく下つた頃であつた。陸奥は大手門に鼎を迎えた。鼎は馬をおりと陸奥に近よつて来てその骨太の手で陸奥の手をがつしりと掴んだ。それからしばらく言葉もなく食いいるように陸奥の老いた眼差しをみつめた。

鼎は衣服をあらためると、江戸詰次席の櫻村

秀作と二人で奥に通つた。重治へ帰参の挨拶である。陸奥と左膳がそれに侍した。奥では今日も琴の音がしていた。浅川のひく千鳥である。

重治は鼎の言葉をききながらも、絶えず聞えて来る琴の曲に耳をかたむけていたが、やがて鼎の言葉が終ると、ひとことぼつりと「公方はどうなされた」といつた。

「水戸から駿府宝台院にうつられました」さげすみに似た冷やかなかが重治の白い頬をかすめた。しばらくそのままじつと鼎をみつめていたが、やがてものういように「何故だ」といつた。

「ひたすら恭順でございましょう」

鼎がいいおわらぬうちに、重治はつと座を立て、鼎に白眼がちの眼差しをくると奥へひいた。陸奥は鼎と対座した。二人きりである。

四方の障子襖はとりはずした上、なお念を入れて筆談であつた。陸奥の手がまずうごく。趙子昂に似た肉太な達筆である。

「薩摩勢を選え撃つてはとせらるるや」

たちどころに鼎の筆が走つた。

「否」

陸奥がさらに筆をとつた。

「黒菅城を支え得るや」

「一句の日之を支え得るや否や保し難し」

「恭順を是とせらるるや」

「恭順の他なし」

「恭順は望み得らるるや」

「しかり、私案あり」

風にゆらいでいる蠟燭の灯に鼎の手蹟をかざし読むと、陸奥は老いた頬にかすかな笑いをうかべ、楮の匂いのこもつたその厚い紙を静かに火鉢にかざした。くすぶりが白い煙をあげ、やがて蛇の舌のような炎が一瞬二人の頬を染めて燃え上つた。木枯しが破風にはげしい唸りをあげていた。鼎が下つて行つたあと、陸奥はしばらくぶりにぐつすり睡つて、長十郎のゆりおこすまで暁を知らなかつた。

翌日も冴えきつた冬の空であつた。薄氷のはりつめた盆地の刈田の中を流れている雪笹川が凍りついたようにつめたくにぶい日差しをあびている。陸奥は黒菅盆地十二カ村の庄屋に刈り入れた新稲をことごとく上納するよう藩令を下した。いつもならば庄屋は村年寄同道黒菅城まで呼び出されるのだが、今日は大手門から十二騎が村々に飛んだ。陸奥はまた赤石の町にあるかぎりの塩を求めさせるため十駄の馬も出した。それから長十郎をつれて天守に上つていつたが、見はるかすすでに藩令は十二カ村にわたつたのであろう。遠い鷺合山や天人山の山裾には蟻のように百姓たちがうごめいていた。弱い日差しが寒々と白い土蔵の壁にうつっていた。米俵を運び出している百姓の背中当てのけらが、雪笹山から吹きおろす北風に凜しべをはためかせている。陸奥はしばらくそんな遠い風景につかれた眼をやつていた。

陸奥の心はすでに恭順を決した。藩主重治と山中家社稷の安泰さえ薩摩勢がみとめてくれるならば、陸奥の老腹を割くことはもとより願うところである。会津も庄内も盛岡も奥羽の雄藩がことごとくすでに西軍の軍門に降つたからには独り黒管のみが汚名をうけるわけではない。だが、恭順と決したからにはそのただひとつの条件は黒管六百の藩士の生命にかけても薩摩にみとめてもらねばならぬ。藩主重治の心は今もひたむきに徳川家への忠誠を念じている。その時、まだ暑さの残つていたあの日の思い出が陸奥の心によみがえつた。それは熊坂村の閑居にいた陸奥が特使をもつて再び城に召された日のことであるが、陸奥が奥にすすむと重治は「のう陸奥」

といつてから、じつと陸奥をみつめ、しばらくそのまま息をのんでいたが、やがて重い鈴をころがすような声で

「陸奥も存じよりのように当藩は三河発祥以来譜代の御愛顧を蒙つてゐる、それに家慶公の那須お鷹狩の砌、公が予をとくに側近に召され、あの雁を射よと仰せられたことがあつたのを陸奥もおぼえていよう、予が三射に三羽を射落すと、公はお手をあげて和泉天晴れとおおせられ、予の肩に手をおかれた、予はいまだにそのお手のぬくもりをおぼえている、たとい黒管二万三千石の地を奪われ、領内の民ことごとく生贄になろうとも予の心はかわらぬ、陸奥、この予の心持をわかつてくれるのう」

といった。その時陸奥はただ「御意」と答えたにすぎぬ。あるいはその時から今日のことを考へていたかもしれぬ。恭順のことは重治にも秘せねばならぬのである。もし己れの心のうちが城中に知れわたれば、白河口の敗報以来沸き上つてゐる藩士たちは蜂の巣をつついたさわざとならう。おのれをさしおいて、重治直々の評定がはじめられることも考えねばならぬ。そうなれば重治の言葉通り黒管盆地三万の人の血が仙人沼峠から赤石峠にかけての街道一面を赤く軋とをかすめていた。

「藩是はすでにきまつてゐる」「藩士を薩賊の墓場とせよ」「われらは伊達や南部の食禄ぬすつとと違ふ、薩摩の奴もはじめて東北武士の手剛さに眼をむくぞ」次第に殺氣のみちはじめた城中には、そうした罵声が声高にきこえていた。若々しい張りがみなぎりあふれている声であつた。西溜りの控所で、思いをこらしている陸奥にもそんな声はきこえていた。その騒々しさの中に領内十二カ村へ督促に走るもの、赤石の港に向うもの、城壁に土囊を築くもの、竹槍に油を塗るものなど、戦いを旬日の後にひかえた最後の営みがつづけられていた。重治がひとこと死ねといえど喜んで死ぬ人たちなのだ。陸奥はそうした雑役にしがたつてゐる卒どもの唄う黒管節を耳に追つた。ききなれたその節まわしに、死をあきらめている人の哀調が流れて来た。辰の刻に鈴木鼎が登城した。陸奥は鼎の手を

とると渡櫓のひと部屋にはいつていつた。ここは四方を厚く土壁で塗りこめ、濠に向つて二尺四方の小窓がひとつあいてゐるばかりである。小姓の長十郎に表に人を近づけぬよう命じると重いひき戸をひいた。肌をさす冷たさが凍りつてゐる中に、陸奥は坐ると

「御存知かと思うが殿には恭順のお考えなど毛頭ない、藩士たちにも恭順を願うものは一人としていぬのは申すまでもない、天晴れな黒管武士よ、重役のうち左膳、真琴、三右衛門の三名は説けばわれらが心に従つてくれるだろう、それで、この藩論を恭順にもちきたす手段だが……」

と静かに言つた。鼎はしばらく窓の外に眼をやつていた。鳶が一羽、風をきつて円を描いてゐる。

「無理かのう」鼎はそう答えたが、眼はぎらぎらと光つていた。そして

「まず、重役の意見をまとめずばなるまい」と答えた。長十郎がよばれてひそかに重役がよびあつめられた。城づめの八名に、江戸次席の榎村秀作がとくに加えられた。顔がそろつと鼎と秀作から四圍の情勢が微細につたえられた。終るのをまつて陸奥が重い唇をひらいた。

「所詮討死と覚悟されるか」

一人一人を順次みてゆくのである。十名の顔色には小窓から流れこむにぶい冬の空が鉛色に

よどんでいた。

「御承服とみえる、さて、藩侯の御血統もあと十日余りで絶えることとなるが、それについて御意見はないか」

ふいに主税がすすりあげた。すすり泣きはやがて一座をおつた。静かに涙をのんでいるのは老齢の陸奥と左膳と三右衛門の三人である。歎歎がおさまるのをまつて陸奥は咳払いすると

「一案がある。藩侯御一族の御安泰をただひとつの条件として恭順の願いをする事だが」

静かな沈黙がしずんだ。だが、それも一瞬であつた。壺井勝作が

「そのような願いを殿がおききとどけになるものか」

鍾のような声であつた。

「それはわからぬ」

陸奥の声が応じた。それから

「殿に申し上げてみよう、その前に重役十名のこれについての意見をまとめた、各々思うところを述べられるがよい、まず席次によつて左膳殿よりお願いしたいのだ」

左膳は白髪をかしげながら

「そうよ、殿の御安泰さえききとどけられるなら」

と答えた。その時ふいに主税がにじり出た。

「藩老、御説は条理がととのうているようにみえる、ただし、豺狼の西国勢に武士の心がわかれると思えぬ、鳥羽伏見の戦いはもとより、上野の戦いも、今度の白河攻め、会津攻めも、ひ

たすら恭順を願つたものに対して薩摩がしかけたわなにわれらがかつたにすぎぬことは、もはや藩中誰一人知らぬものはない、世良修蔵が口に奥羽列藩の歎願書をききとどけるといながら、肚でわれらを賊あつかいにしていたことは、藩老ももややお忘れであるまい、ひたすら恭順を願うところで、勢いにおごつた薩賊に何のききいられようものか」

主税は激しくすると、額に青すじがうき上りこめかみがびくびくふるえた。陸奥はその言葉を手で制した。

「御意見はうけたまわる、重徳殿は如何だ」

陸奥の考えた通り、左膳、真琴、三右衛門が陸奥に同意したのである。主税が

「お年寄は生命が惜しいとみえる」

と舌打ちした。だが、陸奥はそれが聞えぬように座をたつと

「私はこれから殿の御意見をうかがつてみよう、午の刻、奥に一同お集り願いたい」といつた。

こうした評定がその日一日つづけられ、翌日にもち越されて、申の下刻までつづいた。そうした評定の間にも、ひらかれた城門からは、領内十二カ村の新米が運びこまれ、赤石に出むいた輜重方は馬の背にふりわけた塩俵をはこびはじめていた。

短い冬の日差しがくれかかつた頃、評定につかれた重役は屋敷に下つた。その夜亥の刻に最後の集りをひらくため、暫時の休息をたまわつ

ていたのだが、座敷で仮睡んでいた鈴木鼎の耳に、表の棟門のあたりで声高に罵る声がきこえて来た。鼎が耳をすますと

「鼎殿に会いたい」

という声がきこえた。声は一人でなく、数人の声がまぢまぢにひびいている。答えているのは江戸からつれ帰つた家来の逸策であつた。

「主人は今夜大奥の御評定がある故、只今休息されている。御用は後で御城内でうけたまわりたい……」

逸策の声がそこできれて、米俵でも倒れかかるにぶい地びきがかすかにした。同時にいりみだれた躰音が玄関から土足のまま乱入した。

鼎は刀架にかけてあつた太刀をにぎるとすぐ庭先にとび出した。月明りが濡れるようであつた。

足袋はだしのまま、どうだんの茂みに入ろうとした時、追いかけて鼎を袈裟がけに斬つたものがある。深傷であつたが鼎は太刀をぬきあわせた。返り血をあびた指南役の山崎剛太郎が立つていた。

「無礼なもの」

鼎はそれだけ叫んで息が絶えた。

同じ時刻に堀江真琴のところへも山中左膳のところへも乱徒が押しいつた。左膳の妻の要子は氣丈に乱徒の前に立ちふさがつた。

「貴方は御藏奉行の津島喜平次殿ではありませんか、土足とは何ごとです」

要子はそう叱咤した。津島は少しひるんだが、後からはいつて来た鈴木主税が要子の胸もとを

つきさした。要子が倒れたのをみて津島が奥の間に進んだ。左膳はすでに割腹していた。

真琴は妻のかねと茶室で茶をたてていた。真琴の家に向つたのは、真琴の推挽で新しく御徒頭となつた服部英秋であつた。服部はさすがに真琴の前でふるえた。十年にあまる茶道の友達であり、かねは英秋の異母妹にあたつていたからである。鈴木主税や山崎剛太郎がその日服部をかたらつた時、服部は勿論真琴も討たねばならぬことを知つていた。彼はいたづらな恭順がかえつて主家を滅すものだと思つていた。義は情を滅すのが武士の信条である。だが、服部は真琴の家ではさすがに履物をとつていた。そして同勢は庭にまわし、自分一人茶室にむかつたのである。真琴は服部の顔色で万事を察した。「よく来てくれた、最後だから、私の手前をみていただきたい」

そういうと、自分でたてた茶を帛紗につつんで服部にすすめた。服部はそれをうけとつて味わうと

「お見事」

といつてそれを返した。真琴はほつとあるかなしの微笑を顔にうかべて

「貴公には早くおはなしすべきだつた、おはなしすればわかつてくれたものと思うと残念だがこゝまで来ては問答も無益であらうし、貴公ももはやひけまい、斬られい」といつた。かねがまず斬られた。服部の刃の下に身をなげたからである。真琴は自分の脇差で

苦しんでいるかねの息の根をとめると、今度はその脇差を青眼にかまえた。だが、服部にうちこむでも、服部の刃を受けるでもなく、右肩から左乳に斬り下げられてうづぶせに倒れた。こゝうしたことは戌の刻のことであつた。

陸奥はそのことを知らなかつた。今夜こそ重だつた十名の意見をまとめねばならぬ。そしてすぐさま御目見得以上の総登城を命じねばならぬ。ことによつてはこの白髪首を洗つて南部の藩老たちのしたように、仙台まで馬をはしらさねばならぬかもしれぬのだ。もはや一刻も延引することは出来ぬ瀬戸際におしめられていた。それは薩軍の先鋒である土肥の兵が三春の兵を先導に、間道ぞいに石巻を發したという報せが西の下刻に陸奥のもとにとどいていたからである。もし仙台の主力が動きはじめ、街道ぞいに騎馬をすすめるならば、六七日のうちに先鋒は鷹巻の町に達するであらう。鷹巻から仙人沼峠は招呼の間である。陸奥はいらだつていた。陸奥の考えを支えてくれるとわかつているものは、まだ三右衛門しか登城していない。だが、いままでの評定通り恭順のもの五人とあくまで戦いをとねえるもの五人ということになれば、陸奥は、重治の決断を仰ぐつもりであつた。重治はいままで一度として陸奥の決裁にさからつたことはない。いかにそれが重治の意に反しても陸奥の言葉に重治は従つたのだ。重役のとりきめが、同数の時には、重治から恭順の鶴の一声を得る目算が陸奥にはあつた。重治さえ恭順とき

まれば、藩士の意見はいかに激しようとも一定出来ることは陸奥の八十三年の生涯が信じている。陸奥は立つて茶坊主を呼ぼうとした。その時、蒼白な顔をした鈴木主税が山崎剛太郎をひきつれてはいつて来た。冷笑するように陸奥を見ると

「陸奥殿、山中左膳、鈴木鼎、堀江真琴、只今相果てましたぞ」

といつた。陸奥の顔が瞬間蒼白にふるえた。それをみると鈴木主税は唇のあたりにうかべたかすかなあざわらいを勝田三右衛門に向けて

「お早々の御登城でお屋敷で面晤できず、残念でした」

といつた。陸奥はすべてをさとつた。だが、蒼白な顔のまま、山崎を次の間にさがらすと、奥に御出座という声をかけた。重治が面やつれた顔をみせて上座についた時、陸奥はしわがれた声で、

「殿、土肥の兵が石巻を發したということです、藩是を決したいと存じます」

といつて、それから三右衛門の方にむきなおると

「勝田殿」

としわがれた声をかけた。三右衛門の眼差しが一瞬たゆたいたながら陸奥の眼に落ちた。陸奥は眼をしばたいたっている。やがて三右衛門は心の決したように

「私の考えはかわりませぬ」と答えた。七人のものがつきつきに意見をのべ

終つた時、重治は、物の怪にでもつかれたように

「予は徳川家のために死ぬぞ、義のために死ぬのじゃ、身は死すとも名をのこす東北武士の魂をみせてやる、三河発祥以来当家は戦いに負けたことがないのじゃ」

と激した声をつづけた。やがて総登城の触れ太鼓が太鼓櫓からなりはじめたのを陸奥は眼をつむつたままききいつていた。夜気がなんとなくゆるんでいた。雪がふりはじめているらしい。

太鼓の音はその雪にぬれて、陰にこもつたにぶいひびきを黒菅盆地につきつぎにおとしていた。陸奥はその太鼓の音の底に旬日のうちに迫つてゐる悲劇の聲音をきいているのであつた。奥からは今夜ものどかな琴の曲がきこえている。

(昭和二十三年十一月)